大庄屋文書から見た酒田の世相（八）

須藤良弘

一、船方等運賃争論と定書

内町組大屋・伊東家と米屋町組大屋・野附家の文書（酒田市立光丘文庫所蔵）からである。なお、文中の句読点は筆者が付け加えたものである。

湊町酒田にとって海運・水運は非常に重要で、それを支えているのが問屋・船方、丁持である。これらの生活を支える運賃があいまいであったことから大きな問題となり、それが次のように解決に向かった。（伊東家文書 "安永八年（一七七九）間、問屋・船方・丁持家業勢之儀、近年 дв方之心得落合不申、時々争論等有之」と、問屋と船方と運送業の丁持の間で意見の不一致から時々争論が起こった。それで「去年秋より追々申上候、右者前々より仕来而已二二、定書と申との無之二付、落合不申事可有思召。去年の秋から酒田御町奉行所に申し上げていたところ、前々
より仕来だけやって、定書がないからといった。
それで、今度、三方共二委敷、御用書、御定書、御算成候、乍去右家業縁細かなる訳、御役所二条御存知無候儀二

申候、問屋、船方、丁持の三方からくわしくいて定書が渡されたが、御役所では右三者の家業の細やかな点がわ

かっていなかった。それで、私共が再び厚く評議をし、下書きして出すようにいわれた。その夜のうちに最上地方へ

の荷物運送などを見細して書きして差し出した。

三月六日、三方より書付差出し、三町仲間差配方・問屋

へ出候、御驚成候。尤、時代者書付、御算候、

方問屋ども出候、右所江御同心両人出候、御帳付読んでし候。

方問屋より次の書付が御町奉行所に出された。

奉行所より書付や御定書、正道の御沙汰二条、

片落成ル義無し、向後此渡を相守、家業仕候八、

以後論有御座間

一枚、鶴岡為御登用車書付、壱人乗書船、

此書付二條、委百五拾文

内隻五拾文船頭、同壱文水主式人、壱人五百文

又人乗書船、此書付委百五拾文、内隻百五拾文船頭、

同壱文水主式人、壱人五百文

（74）
四人乗七舎
此貨せん壱貫五百五十文
内武百五十文船頭、同壱貫五百文水主三人、壱人五百文ツツ

五人乗七舎
此貨せん武貫武貫五百五十文
内武百五十文船頭、同武貫文水主四人、壱人五百文ツツ

飛鳥邊より松山迄、同割卸貯錢

押切行葺積舟貯せん貯錢

貯せん武貫武貫百五十文

大山貯貯貯貯貯

古郡川貯資貯資貯資

市条川貯貯貯貯

但、積卸候義無御座候

同じく安永八年亥四月、『間屋船方町持家業之儀定書』に於出された。町持とはこ持のことである。
前記の藩の米等の運送費を定めた「諸方舟運費」を異なり、一般的の商品運送の舟費である。これは古来から問屋と船方が合意の上船荷費を決めていたのが、近年心得違いの者が出てきたことから争論となった。この度、改めて申し渡すので、問屋と船方が仲良し、利用者の用を辻らせないようすること、もし違反した場合は罰するというので、「役所・問屋・懸船方」の名で出されたものである。

一、丁母直銭之儀、古来より定の通貢物相待可申候

（二項略）

一、箕干厳上両漬より小船二千、積送候分、拾貫入倉儀二付六文ツツ岡丁持請取可申候。蔵入之分八是逐之。問屋

二、丁持謹言之儀、古来より定の通急相待可申候

彼は難浜を申懸、問屋・旅人之諸用為滞間敷事

前からあった丁持定書外之二候間、今度改而申渡者也。

岡丁持は陸上だけの運送に従事する者であるが、中丁持とはこれに相当役と思われ之兵衛等二名、中丁持想代：彦三郎・治郎兵衛、「岡丁持想代：長之助・十郎（一字不鮮明）から「右血判」と記された次の「起證之事」が出されている。

今度、拙者共業方之儀、御定書を被仰渡依懸候、以来右御定書之通、急度相懸、旅人之諸用用無遅滞、相辨候様
二、扶持・御手債の支給

天保十三年（一八八二）二月、酒田三組大庄屋の野附七郎兵衛・佐竹弥右衛門・渡辺隼人・酒田町年寄の鏡谷懸右衛門から御府奉行所に、「右者、去正正月より十二月迄、酒田御町五拾九人御手債銭御手債之分、如此御座候已上」が出された伊東家文書「御用帳」。天保十二年正月から十二月迄に支給された扶持・御手債とその名前である。

「百四拾八人」分は、「酒田御町武拾五人」を下請御扶持方である。これによると、「五人、白崎五右衛門、拾人
上林勇右衛門、拾人、白徳助、拾五人、鏡谷懸右衛門、白崎は年寄格、上林、二木、鏡谷は三十六人衆の年寄
である。外に三十六人衆、大庄屋、豪商、医者、御用職人などで、「弐人、本間信十郎、五人、本間健次郎、三拾五人、本間
等、七郎（本間家当主）十人、斎藤平内、七人、須田幸利、五人、村山と四次衛門、七人、上林源蔵、五人、須階玄益、三人、桜井道秀、武人、白石吉郎右衛門、武人、唐村藤十郎、二十一人、池田七郎兵衛、二十人、津田や大八郎、三十人、徳原人生涯、渡部五兵衛、五人、大沼平八、一之人、杉原伊兵衛、武人、唐村藤十郎、二十一人、池田七郎兵衛、二十人、津田や大八郎、三十人、徳原人生涯、渡部五兵衛、五人、大沼平八、老人、升川や勘三郎、老人、御鉄炮修覆師・但御鉄炮寸志動中、金七、三人、馬原四郎兵衛、小以、百四拾八人
内三人生涯並動中被下請候分。」

（77） 大庄屋文書から読み酒田の世相（八）
三、金銀発掘願い

天保十三年（一八四二）十一月、金主願主・五ノ丁勝次郎、山師・染屋小路路助、肝煎・清助から荒瀬郷青沢村地方と狩川通瀬場村地方での次のような銀の発掘願いが酒田町年寄と大庄屋に出された。自分たちは数年来、藩のために働くことを心掛けたが、理助は金山掘りに巧みで、銀が出れば藩のためになると述べている。
私儀詰不及。御為相待申度、
有恐数年来心懸懸在、
理助儀八近之儀心安営合仕罷在候所、
同人金山伐開方功者
之者二而、荒瀨郷嶋田組青沢地方之鰻倉、
狩川通清川組瀨場村地方字鰻倉、
之儀八道路も頑レ居、銀蝦之山二八相違も有之問敷、
見込通り、銀が出た場合は、
諸国の割合で上納し、雇役などは役人に届けるとし、
上納金八諸国御振合之通、上納可仕仕、
御座候共、不残上納仕度奉候。

上納金八諸国御振合之通、上納可仕仕、
金措資費其外入用之儀八、
其時之役人中江御臨申上置（中略）、
過分之出銀

さらに両人からは、許可された場合、
鰻倉と寺沢を同時に取りかかるのは「締方行届直兼」
ないの、明治三年三月から
両鰻倉に取りかけ、寺沢はその後に、
開発の心掛けと願い九項目を「覚」として提出している。
ここでは三項目だけ
紹介したい。

一、青沢村より雇相願候節八、
相当之費銭を以相願仕度奉候、
青沢村王二而、雇不足之節八、
近在よりも相雇申度奉候。

一、金搾鰻八他所者二御座候へ、
当冬より呼告、
及手配申度奉候之二付、
旅籠屋又八私共方江止宿候節八、
御座候、
可申上候間、逗留為致候ニモ宜様奉願候。
他所者の雇人の逗留願いである。

（79） 大庄屋文書から見た酒田の世相（八）
一是他所者数人相周候儀二付，大勢之内，心得達之者，有之際敷二也無御座候二付，御経方之儀八、何分被仰付被
成下度奉存候。他所者之雇人の中には心得達の者もいるかも知れないの、その取締りをさせてもらいたい。
十一月六日，酒田御町奉行・小川渡大夫から秋保与右衛門・辻順治等五名の郡代に、両人の願書を家老へ伝え、その
指図を受けたいとして、次ぎの書を出している。
「村絵を整御意請、五ノ丁勝次郎・染屋小路助両人之者、荒瀬郷嶋田絵青沢村地方字亀倉、狩川通清川組瀬場村
地方字寺沢、右両所金山開掘之儀、別紙差添願書指出候間、倒両両通差遣、懸御目、委細八右書付二相見候間、文略い
た候、御家老中江宜被仰上度、右御願可得御意如此御座候以上」。
十二月十七日，五名の郡代から酒田町奉行の小川に、家老の許可が次のように伝えられた。「右御紙面之趣、致承知
御家老中江申上候所、勝次郎・助篤願之通、両所開掘被仰付候」。しかし、次ぎのような条件がつけられている。
一、金掘裏八他所者二付、両名より呼寄、手配いたし度右付、旅関屋外、二名より呼寄、手配いたし度右付、旅関屋
右八旅関屋之内二而も職体ニ寄、是迄他所者欠宿為致候振合等有之候八ハ、申立候通御申付、雇方御経之儀八、宜御
四、左而可申出旨御聞置候。
一、右両条之外
七ケ條八御淑済之上、追可得御意候。
右之趣、勝次郎・助助江御申達可被成候」。（伊豆家文書「天保十二年三年
のちほど指図を受けるというものである。
勝次郎の金掘発掘願をは聞き届けられたが、その後、青沢地区で着手したかの記録はない。瀬場地区では前々から砂
金掘りが盛に行われていたが（立川町史）、理を実際に発掘したのか不明である。
四、事件あれこれ

一、弘政三年（一九○）家四人の行方不明事件が起きた。二月九日、筑後町肝煎・長吉から米屋町相大庄屋二
人に、七日既に彦次郎が家出、八日にはその女房がいなくなっていると、次ぎの「御用二付口上書を以、申上候」が出
される。

二月十九日、彦次郎・彦次郎郎・小太郎、同親類・彦兵衛、五人組・三五郎外五名、肝煎から大庄屋二名に「米屋町相大庄屋二
彦次郎母、同人妻共、無行衛二罷成申候付」相、人相衣類書を、申上候」が出された。母、妻子の行方不明届けである。

「一年五十八、背高の方、肉色黒、顔面長、眼鼻平常体、髪薄方、同人女房人相衣類書、申上候」が出される。母、妻子の行方不明届けである。

右彦次郎郎、御用之節御座候所、同月七日に風家出仕、行衛相知不申候付、親類五人組之者、尋出候様被仰付候、領其外所々手付、入念相尋申候得共、彦次郎・母・妻子共、今以、行衛相知不申候、依之、人相衣類書付を以、御用控」。

（野附家文書「弘政三年 御用控」）
彦次郎は罪を犯したものの、調べようとしたところ逃走。それを捜している時、母・妻子を逃走した彦次郎に、彦次郎は次のように語る。

「母は彦次郎を待っていた。彦次郎は母に会いに来た。彦次郎は母に罪を犯したことを告白した。彦次郎は母に謝罪した。彦次郎は母に感謝した。彦次郎は母に愛を誓った。彦次郎は母に永遠の愛を誓った。」

彦次郎の言葉に、母は涙を流した。母は彦次郎の事を愛していた。母は彦次郎の事を忘れることができなかった。母は彦次郎の事を永遠に愛するつもりだった。
江戸藩部に逃げ込んできたがどのように処理されたのか不明である。
なお、大庄屋の野附がこの事件の責任を問われたものの、十月日には
「猶又、半方より飛脚参り、鶴岡表首尾能様
子相知させ呉候、昨九日御奉行所へ差控書申上候所、私用慎無在候様、被仰付候」と、
形式的な処分のようである。（野附家文書『寛政三年御用控』）

右女者、最上より連参候女房之由、乍去時家も無之、
屋敷の三二有之。当人者知合之所専従御致し候ものの二付、
親類預ケ之儀被仰付候所、又御町方親類無之。尤も、三軒有之由二候へ、
いつれも郷中之由、女は最上から連れ
いたが記されてある。藤四郎は御町に屋敷はあるが家はなく、
知人の所を輪々としていた。その間、女房はどうやって
いたかが記されている。

「右付、手錠之上、組内御預ケ二相成
右五月廿一日七時頃申付科、二十分夜の事件が、廿一日には
処分が決まっている。親類が町にいないため手錠をかけられ、
組預がかりとなった。しかも微罪と認められたためか、
外藤四郎様、廿四日手錠御免、日頃相違せん。」
二罷成候二付、人相前類書亦以奉願候が提出された。留治の臍に付で「家名」とある。

一、年二拾六歳、背高、中肉、丸顔色白、髪薄、眼耳口常騒、鼻筋通一、木綿藍嶋古錦入荷ツ

右藤四郎（臍

文書「明和四年御用帳」と、奉行所役人である帳付の反対により願いは却下された。